

# 周遊路を結合してできる過程の汎関数極限定理

矢野孝次 (京都大学大学院理学研究科)

伊藤 [1] の周遊理論によると、原点正則再帰的なマルコフ過程  $X$  を、局所時間  $L$  を用いて原点を起終点とする周遊路に分解するとき、周遊路に値を取るポアソン点過程  $p$  が得られる。その特性測度  $\mathbf{n}$  を周遊測度と呼ぶ。逆に、周遊測度  $\mathbf{n}$  が与えられれば、それを特性測度として持つ周遊路値のポアソン点過程  $p$  をとり、元の過程  $X$  と局所時間  $L$  とを再構成できる。

本講演の目的は、周遊測度列の適切な収束概念を導入し、その収束を仮定して  $(X, L)$  の同時分布の極限定理を導くこと、さらにその応用例を与えることである。講演の内容は論文 [3] に基づく。なお、極限定理は昨年講演と同じで、応用例は新しい結果である。

## 1. 汎関数極限定理の一般論

$E$  を Polish 空間とし、一点  $o \in E$  をとり原点と呼ぶ。  $E \setminus \{o\}$  上の  $\sigma$ -有限測度  $\nu$  に対し、 $\nu$  を特性測度とするポアソン点過程を  $(p(l))_{l \in D(p)}$  とする。  $l \in [0, \infty) \setminus D(p)$  では  $p(l) = o$  として拡張して得られる点過程を  $p = (p(l))_{l \geq 0}$  と書き、**原点外ポアソン点過程**と呼ぶ。

$E$  値 càdlàg path の全体を  $D = D_E$  とし、原点に一度到達すると停止する道の全体を  $D^o$  と書く。座標過程を  $X = (X(t))_{t \geq 0}$  と書き、 $T_x = \inf\{t > 0 : X(t) = x\}$  と書く。ずっと原点に留まる path のことも同じ記号  $o$  で表す。  $E$  の距離  $d$  について、原点との距離を  $|x| = d(x, o)$  と表し、 $\|w\| = \sup |w(t)|$  と表す。一般に、 $D$  上の  $\sigma$ -有限測度  $\mathbf{n}$  が 4 条件

$$(N0) \mathbf{n}(D \setminus (D^o \cap \{0 < T_o < \infty\})) = 0;$$

$$(N1) \int_D (T_o \wedge 1) d\mathbf{n} < \infty;$$

$$(N2) \mathbf{n}(D) = \infty;$$

$$(N3) \mathbf{n}(\|X\| \geq r) < \infty \text{ for all } r > 0$$

を満たすとき、**周遊測度**と呼ぶことにする (拡張された定義)。このとき、 $\nu$  を特性測度とする原点外ポアソン点過程  $p$  から狭義増加 Lévy 過程  $\eta(p; l) = \sum_{s \leq l} T_o(p(s))$  が定まる (簡単のため、原点での停留はないものとする)。これより局所時間過程  $L(p; t)$  および周遊路を繋いだ càdlàg 過程  $X(p; t)$  が得られる。なお、上の条件だけだと、一般に  $X(p; t)$  はマルコフ過程とは限らない。ここで、法則収束が確率空間の取り換えで概収束にできるという Skorokhod の定理をまねて、周遊測度列の収束概念を与える。

**定義 1.** 列  $\mathbf{n}_n$  が  $\mathbf{n}_\infty$  に**周遊測度の意味で収束する**とは、ある Polish 空間  $\tilde{E}$  とその上の  $\sigma$ -有限測度  $\tilde{\nu}$ 、および可測写像列  $\Phi_n : \tilde{E} \rightarrow D$  であって以下を満たすことを言う：

$$(G1) \mathbf{n}_n = (\tilde{\nu} \circ \Phi_n^{-1})|_{D \setminus \{o\}} \text{ for } n = 1, 2, \dots \text{ and } \infty;$$

$$(G2) \Phi_n \rightarrow \Phi_\infty \text{ in } D, \tilde{\nu}\text{-a.e.};$$

$$(G3) T_o(\Phi_n) \rightarrow T_o(\Phi_\infty) \text{ in } [0, \infty], \tilde{\nu}\text{-a.e.};$$

$$(G4) \text{ある } N \in \mathbb{N} \text{ が存在して } \int_{\tilde{E}} \{1 \wedge \sup_{n \geq N} T_o(\Phi_n)\} d\tilde{\nu} < \infty.$$

**定理 2.** 周遊測度列  $\mathbf{n}_n$  が周遊測度  $\mathbf{n}_\infty$  に収束すると仮定し、さらに  $\mathbf{n}_\infty(X(T_o-) \neq o) = 0$  と仮定する。このとき、 $\nu_n$  を特性測度とする原点外ポアソン点過程を  $p_n$  と書くと、

$$(X(p_n), L(p_n), \eta(p_n)) \xrightarrow{\text{law}} (X(p_\infty), L(p_\infty), \eta(p_\infty)) \quad \text{on } D \times D_{\mathbb{R}} \times D_{\mathbb{R}}. \quad (1)$$

## 2. 自己相似過程の跳入拡張の均質化

[2]においては、拡散過程の跳入拡張に対し、スケール極限における均質化の定理を与えた。それは、speed measure の均質化で Bessel 過程が現れる要素と、跳入測度の均質化でべき測度が現れる要素との混成であった。ここでは後者だけに着目し、はじめから自己相似性を持つ連続流入過程を考え、その跳入拡張に対する均質化の極限定理を与える。

$E = [0, \infty)$  とし、 $o = 0$  とする。 $\{X, (\mathbb{P}_x)_{x \in E}\}$  は原点正則再帰的マルコフ過程で、 $\mathbf{n}(X(0) \neq 0) = 0$  および  $\mathbf{n}(X(T_0-) \neq 0) = 0$  を仮定する。さらに、任意の点  $x$  で  $\mathbf{n}(T_x < T_0) > 0$  を仮定する。定数  $1 < b < c$  と  $0 < \psi < 1$  が存在して以下を満たすとする:

(S1)  $\{\Psi X, \mathbb{P}_x\} \stackrel{\text{law}}{=} \{X, \mathbb{P}_{\psi x}\}$  for all  $x$ . 但し、 $(\Psi w)(t) = \psi w(ct)$ ;

(S2)  $\{b^{-1}L(\cdot), \mathbb{P}_0\} \stackrel{\text{law}}{=} \{L, \mathbb{P}_0\}$ .

$\xi$  を非負  $\mathcal{F}_{0+}$ -可測汎関数で  $\xi \circ \Psi^{-1} = \xi$  なるものとし、 $j$  を  $(0, \infty)$  上の測度として、

$$\mathbf{n}_{\xi, j}(dw) = \xi(w)\mathbf{n}(dw) + \int_{(0, \infty)} j(dx)\mathbb{P}_x^o(dw) \quad (2)$$

と定める。但し、 $\mathbb{P}_x^o$  は原点停止過程の分布とする。 $\mathbf{n}_{\xi, j}$  が周遊測度であるとき、対応する過程を  $\{X_{\xi, j}, L_{\xi, j}, \eta_{\xi, j}\}$  と書く。

**定理 3 (small jumping-in).** 以下を仮定する:

(S3-a)  $\mathbf{n}(D \setminus [D_{1,x} \cup D_{2,x}]) = 0$  for all  $x > 0$ .

但し、 $D_{1,x} = \{T_{\psi^n x} \rightarrow 0\}$ ,  $D_{2,x} = \{\liminf T_{\psi^n x} \geq T_o\}$ .

(C-a)  $\xi^*(w) = \xi(w) + \int_{E \setminus \{o\}} \frac{j(dx)}{\sigma(x)} 1_{D_{1,x}}(w)$  とおくととき、 $\mathbf{n}_{\xi^*, 0}$  も周遊測度。

このとき、 $\mathbf{n}_{\xi, j}^{(n)} := b^n \mathbf{n}_{\xi, j} \circ (\Psi^n)^{-1}$  は周遊測度の意味で  $\mathbf{n}_{\xi^*, 0}$  に収束する。さらに、

$$\left\{ \Psi^n X_{\xi, j}, b^{-n} L_{\xi, j}(c^n \cdot), c^{-n} \eta_{\xi, j}(b^n \cdot) \right\} \xrightarrow{\text{law}} \left\{ X_{\xi^*, 0}, L_{\xi^*, 0}, \eta_{\xi^*, 0} \right\} \quad \text{as } n \rightarrow \infty. \quad (3)$$

仮定が煩雑になるが、跳びのみの過程に収束する場合の定理も与える。

例として、正值自己相似過程であって Lamperti 変換で対応する Lévy 過程がスペクトル負のものを扱う。また、少し修正した定理の例として、Walsh のブラウン運動も扱う。

なお、Sierpiński gasket/carpet 上のブラウン運動でも、 $\mathbf{n}(D \setminus D_{1,x}) = 0$  が言えれば類似の結論が得られるのだが、今のところわからない。

## 参考文献

- [1] K. Itô. Poisson point processes attached to Markov processes. In *Proceedings of the 6th Berkeley Sympos., Vol. III: Probability theory*, 225–239, 1972.
- [2] K. Yano. Convergence of excursion point processes and its applications to functional limit theorems of Markov processes on a half-line. *Bernoulli*, 14(4):963–987, 2008.
- [3] K. Yano. Functional limit theorems for processes pieced together from excursions. In preparation.